

2015岡山市芸術祭

岡山市民の文芸

第47回岡山市民文芸祭受賞作品

一般の部

【現代詩】

◎岡山市長賞

傳三郎太鼓

山本照子

児島湾干拓事業は百年以上もむかし
藤田傳三郎の出資によつてはじめられた
新しく生まれる国土に
日本の未来をたくした傳三郎

私の曾祖父も曾祖母も
京都から藤田に入植した
藤田傳三郎から藤田の名をもらつたこの地で
ヨシを取り 貝殻を取り
塩抜きのための溝を掘つた
時には水売り船がやってきて
なけなしの金で水を買うこともあつた

傳三郎と入植者の夢はかなつた
昔海だった この地の
たんぼの稲たちはたっぷりと水を吸いあげて
真つ青な空へ届こうと
つんつんと音をたてながら伸びてゆく
たらたらと汗をながしながら
草を抜くわたしの呼吸と
稲たちの呼吸がかさなつて
真夏のたんぼは祭りのように賑わっている

傳三郎と入植者を讃える
傳三郎太鼓が産声をあげたのは
二十年前だつた

この地の 青田風を 白鷺の優美な舞を
なによりも足が地についた豊かな暮らしを
こよなく愛する人たちの手によつて

そして今宵
お祭りに集う人々が見まもるなか
わたしは十二人の仲間たちと
傳三郎太鼓を打ち鳴らす
ドドド ドドーン ドドドド ドドーン
太鼓を打つ十三人の思いがひとつとなり
空のどこかで息づいている傳三郎の野望を
入植者の苦勞と心意気を
自転車を走らす子供達の輝かしい未来を
藤田平野に 轟かす

腹時計

光
田
杉
雄

腹がくうと鳴る

人はこれを腹時計という

昼の十二時がくるとこの時計不思議とくうと鳴る

時報の合図か

昼食の催促か・・・

長針も短針も秒針もないのにどこで時を刻んでいる

脳から指示が出されるのか

音は腹のどこから出す

腹に楽器が有るでもなし有ったらどんな楽器だろう

又、くうと鳴る

時計を見れば

十二時を少し過ぎていても

鳴らない時もある

なぜだ

時計の故障か？

だが

修理しなくても又鳴り出す

食べれば腹がふくれる

今度はげっぷが出る

お腹のお礼の返事か

有難うと言っているのか

自分の意思に関係なく

どこがコントロールしているのか

げっぷが出ればお腹が少し楽になる

お腹が空くのも

げっぷが出るのも

自分でコントロールできない

自分の体なのに自分でできない

体の不思議な現象だ

個人差もあるだろうが

又、くうと鳴る

時にはくうぐうぐうとひつこく鳴る早く入れろと

催促の督促だろうか・・・

また生命へと

高山秋津

胎児は 粘土の塊に見えた
馬鈴薯にも見えた
これが一つのいのちなのか
なるほど眼・鼻・口があり
細い腕も足もあるではないか
そして

それらが皆 動いている
手にはうす青い水かきがついているようだ

4Dの画面に対うと

いつしか辺りから音が消えている
しんとした中

わたしはたった一人で
深さの見えない湖の底を
覗いている気持ちになった
ひたひたと

わたしの裡を
足音が溯ってくる

湖岸に最初に立ったのは
いったい誰だったのか
重なり 連なり

受け渡され 受け渡して
今 この胎児へ辿り着いたのだ
受容という静けさの中で

いくつもの生命は
ほどかれて結ばれ 羊水を漂いながら
また生命へと
光っていくのか

「ゆつくり ゆつくりと大きくなって」
そうつと声を掛けた
この時

胎児が確かに
くつくつと 笑ったのだった

来訪者

ようこそ いらっしゃい
いつものように お入りください
片付けの行き届かないところもありますが
あなたの愛用の席は
いつも準備してあります

くつろいでくださいね いつもの場所で
ちよつとご覧になれますか
この向きから見える景色が お薦めです
今日は とりわけ
緑が揺れていますね
季節や天気が 移りゆくそのたびに
私たちが眺めるほんの一刻は
今だけの景色を 広げてくれますね

ここへ到着するまでに
どんな日々を過ごしてきましたか
あなたの心の中の道標は
どんな姿をしているのですか
これから どちらへ向かうのでしょうか

ここにいる間 少しの間
花に嵐のたとえに 私たちは酔いましょう

出発の時間のようですね
ここから見送ります
また 立ち寄ってください
次に会えるときには
あなたも 景色も わたしも
今とは違った姿で ここに集いましょう
どんな景色に 私たちは包まれているのか
その一刻を お楽しみに

自分のためではなく
人のために言葉を使えた日には
心に窓がひとつ増えます
次の来訪が永遠と思えるほど先でも
消えることのない窓の灯りのもとで
私は あなたの席を守り続けましょう

◇岡山市教育委員会教育長賞

宝石

栗原由美

試合に負けて
グローブを投げつけ
唇を震わせて
手の甲で涙を払いのけていた子が
花束を渡してくれる時
私のハンカチを取って
涙でくしゃくしゃになった顔を
拭いている

昔から泣き虫だった
負けず嫌いの泣き虫だった
その子が
晴れやかなこの歓びの席で
一番素直に泣いている
今までありがとうと泣いている

いい母親ではなかった私が
頂いてもいいのかな
どんな宝石より
その涙
一番の輝きを放ちながら
今日
私の宝物になった

【短歌】

◎岡山市長賞

敗戦の直後に逝きし姉三つ「リンゴの唄」をうたいしと言う

安井 節夫

◇岡山市教育委員会教育長賞

三分の遅れを待たせバスの来てわれより先に青田風乗す

水島 公子

ハート型見つける度に喜んで幸せってねそんなものかも

栗原 由美

何もかも忘れし母が手を取りてゆつくり撫でてくる手温し

河本 律子

「敵機に聞こえる泣くな」叱られし防空壕の男らの声よ

安井 和恵

【俳句】

◎岡山市長賞

滴りの山気動かすひとしづく

名木田 純子

◇岡山市教育委員会教育長賞

節分や鬼の後ろを鳩歩く

津田 孝太郎

ホスピスの姉の手にぎる夜半の秋

佐藤 宣枝

夏足袋の白さ眼にしむ葬の列

長江 康子

満月を掬ひ上げたり四手綱

三好 泥子

【川柳】

◎岡山市長賞

天命を信じゆつくり舟を漕ぐ

遠藤 哲平

◇岡山市教育委員会教育長賞

穂の先がようやく垂れてきた私

永見 心咲

女の火陽炎となり走り抜け

吉崎 初恵

軽過ぎる命へたつぷり灯を点す

杉山 ヨシ子

呼び水を下さい記憶切れ切れに

野島 全

【随筆】

◎岡山市長賞

辞書

長 櫓 潔 美

今夜こそ友へ手紙の返事を書こうと、万年筆と便箋、電子辞書を用意して書き始めた。途中あやふやな漢字があつたので辞書で調べようとしてボタンを押したが、何度押しても辞書の画面は暗いまま。どうやら電池切れらしい。今まで電池切れになりそうな時は予告があつたのに、今回は突然使えなくなってしまった。あいにく電池の買い置きはない。思案の末、本棚から紙の辞書を持ち出した。

紙の辞書を使うのは何年ぶりだろう。十年近く前、資格試験の勉強をするのに百科事典や現代用語辞典が必要になった。その時講師から「便利ですよ」と勧められたのが電子辞書であつた。コンパクトな一冊の中に各種の膨大な知識・情報が内蔵された電子辞書は、当時の私には「これぞ文明の利器」だった。老眼になりかけていた私は画面の大きい物を購入したので、文字も細部まではつきり見える。それ以後は英会話のレッスンの時間までも、もっぱら電子辞書を愛用してきた。

久しぶりに使い込んだ紙の辞書をめくってみると、何だか懐かしい手触り。そして電子辞書にはない広がりや深さを感じた。電子辞書では検索する語だけの情報しか見えないが、紙の辞書は探す語に辿り着くまで色んな言葉に巡り合える。言葉の森を散策しているような気分になる。紙の辞書のよさを再認識した夜だった。

思えば最初に辞書をひくことの面白さを教えてくれたのは、昨年九月に亡くなった父だった。茶の間にまだテレビがなかった時代、特に日が早く暮れる冬期は、夕食後家族だんらんの時間がたつぷりあつた。平生は寡黙な父であつたが晩酌でアルコールが入ると饒舌になり、丸い石油ストーブを囲んで自分の子供時代や歴史上の人物のこぼれ話、出張や旅行で訪れた土地のことなどを語ってくれた。そんなひととき、同じ語でも使う文脈によつて意味が異なることや、音は同じでも意味によつてそれを表わす漢字は色々あるということを、わかりやすい例をあげて教えてもくれた。そしてまだ小学校で辞書について学習する前に、一冊の国語辞典をプレゼントしてくれたのだった。私はその辞書に触った時の新鮮な感動を今も鮮明に思い出す。

また、父が亡くなつて私が初めて手にした本が三浦しをん著の『舟を編む』だった。そこには辞書を「言葉の海を渡る舟」にたとえ、気の遠くなるような年月をかけて膨大な言葉の数々と真摯に取り組む人々の姿が描かれており、私の心を打った。辞書に用いられた紙一枚にしても、何度も試行錯誤を重ねた末の選り抜きの一枚だったのだ。日本語一語一語に対する愛情とひたむきな努力、そして辞書作りにかかる情熱は、私の想像をはるかに超えていた。読後、お酒と本をこよなく愛していた父に、この本を読ませたかったなあと思った。

もうすぐ初盆。仏様になつて帰つて来る父と、ゆつくり辞書の話もしよう。

青春真つ只中

岡 由美子

「おはようございます」合鍵で勝手口の戸を開けると、居間から、Mさんの祝詞をあげる力強い声が聞こえてくる。元氣のバロメーターを確認し、まずは、ほっと胸をなでおろす。

朝のお祈りが終わり次第、バイタルチェック。次に新聞を手渡し、朝食の用意。続いて掃除、洗濯等をするのが、私たちヘルパーの仕事である。

訪問介護の仕事に就いて、二年半が過ぎた。利用者への最初の訪問の時は、先輩のヘルパーに同行して、一人ひとりの細かい支援を習得していく。Mさんは、私が就労して間なしに同行訪問した利用者であった。繁華街のど真ん中の自宅に住み、朝、昼、夕、夜と、一日四回、複数の事業所のヘルパーの生活援助を受けつつ、独り暮らしをしている男性である。下肢の衰えと難聴以外は、お元氣である。

Mさんは、今年の三月三日、百一歳の誕生日を迎えられた。Mさんの元氣で長寿の秘訣は、一体何だろうか。この二年半、Mさんへの延べ六百回余りの支援をとおして、それが解ったような気がする。

一つ目は、神道への厚い信仰心である。Mさんは、朝、昼、夕の三回、神棚に向かい三十分ほどお祈りをされる。最後には、今日という新しい一日を迎えられたことへの感謝。周囲の人たちへの感謝。遠く離れて住む息子や孫、曾孫への平安の祈り、亡き妻への静かな語りかけを欠かすことがない。「感謝申しあげます」と、神棚へ向かって、何度も深々とお辞儀を繰り返しておられる姿を、毎回目にする。

二つ目は、きちんとした食生活である。朝夕玄米と味噌汁を欠かさず、副食は根菜や青菜、青身の魚、鶏肉等、体に良い食事を心がけておられる。また、食前に飲むクエン酸が体によく効くと確信され、長年飲み続けておられる。

三つ目は、物事への旺盛なチャレンジ精神である。例えば、今回の誕生日に向けて、不自由な手書きに替えて、パソコンを勉強され、家族一人ひとりに感謝と自分史とを綴った手紙を記された。氣の遠くなるような作業だったが、何時間もかけて根氣強く入力され、立派な小冊子が完成した。

今朝も、定番の朝食を作り終えた。玄米、具沢山の味噌汁、焼き鯖に大根おろし、小松菜のお浸し、卵の花、りんご、番茶を配膳してお勧めする。エプロンを掛け、歩行器を必死に押しながら食卓に着かれるMさん。全力投球での、規則正しい一日の始まりである。

Mさんに接していると、サムエル・ウルマンの「青春」という詩を重ね合せてしまう。

「青春とは人生のある期間ではなく、心の持ちかたを言う。・・・年を重ねただけで人は老いない・・・」百一歳を過ぎてもなお、信仰心が厚く、情愛豊かで、向学心旺盛なMさんは、今、青春真つ只中である。今日も、Mさんからパワーをもらい、心に虹色の花を咲かせて退出する。

挑戦

森 本 恭 子

ある日気がつくと父の左足がパンパンに腫れていた。十年前の病による左半身麻痺の後遺症で少々のは仕方ないとあきらめ加減だった父もさすがに気になり始め、「足の血流とむくみ改善になかしよう。」と、元々日本武道に関心があったこともあり、近くのカルチャー教室で開講されている杖道入門クラスに見学に行った。

「二人で始めよう。」と思ったが吉日、左半身がやや不自由だが、師範のご理解により「ご無理のない範囲で一緒に頑張りましょう」と晴れて入門を許可され、土曜の朝の二時間、父と私の二人での練習が始まった。杖道は二人一組で型稽古が基本であるため、リハビリを兼ねた父の瞳は好奇心で輝いていた。「人より上手くなる」とか「段位を目指す」とかの気持ちは今の父にはなかった。始めたばかりの未知なる杖が、自分の手で動くことに感動していたのだ。この連鎖反応で脳が活性化され、新たな感覚が戻ってくればと私は期待した。

百二十八センチという杖を使って稽古する中で、心まで調えていくのが杖の道。父は左足が不自由であるだけに、時にふらつきながらも懸命に態勢を立て直し、杖で打ったりまた掛け声を出して突いたりしながら基本の動作を繰り返した。何の変哲もない一本の杖が、持ち手によって魂を吹き込まれたように、あらゆる表情をもって動き出すのだ。その時の自分の気持ちの持ち用が、素直に杖の動きへ現れる。目は心を現す、杖も心を現す。まさに、杖の動きは心と体の動きと連動していた。すでに杖道歴の長い先輩方の大きな声と颯爽とした杖さばきを見ていると、杖道は格好よい！私たちも袴姿の凛々しい杖の使い手になりたいと、父は若々しく元気な己の姿を、私は勇ましい女流剣士の姿を思い描いた。

稽古を始めて三年が過ぎた辺りから、次第に父の足取りがしつかりしたものになり、ややうつむき加減だった背筋も一段とよくなってきた。週一回の練習時間だが、家での素振りや、後ろ向き歩行の訓練など地道に精進した賜物だろう。頑張り屋の父は、左足が重く動き辛い日も、稽古仲間から元気をもらえらるからと休まず見学に行った。私が動きをいくつか見せると、「ここは、何々だろう」と指摘があるほどだ。予期しない病により活動範囲を制限されたが、物事に挑戦的に取り組む姿勢は健在であり、それは父の哲学でもあるのだろう。

今、父は新たに杖道といった楽しみを見つけたことで充実した日々を送っている。八十歳を目前に背中はずっ直ぐで、杖なしで早足にたったと歩くこと、それが目下の目標だ。

目指すところは決して高くはない。が、例え小さな歩幅でも、皆の活力をいただきながら、二人での型稽古も様になって、何年か後には太刀や杖の使い手となる日がやって来る。そう、相方として見守りつつ、新たな生きがいを見つけた父を応援している。

三匹のメダカ

清川 文 香

大きな鉢に浮かんだ美しいピンクの花。ホームセンターの広告の写真を見てスイレンを植えてみようと思いついたのは、去年の夏のことだった。

実家の庭の隅に雨水を溜めている土色の古い瓶かめがあった。スイレンの鉢にしたいと父に話すと、きれいに洗って持ち帰らせてくれた。

これで準備万端。早速スイレンの苗を一鉢買って来て、説明書通りに植えてみた。水面に葉が浮くように高さを調節するのに苦心した。年季の入った瓶は、思ったとおりスイレンの葉の緑と調和してなかなか渋い。

ここにメダカを泳がせてはどうだろう。瓶の中をながめながら考えていると、もうメダカなしではありえないように思えてきた。

そして次の日、もう一度ホームセンターに出かけた。メダカは一匹十五円。しかし待てよ。家の近くの川に行けばメダカが無数に泳いでいる。あれならすくい放題だ。メダカ網は四百円もするけれど、もし死んでも何度でも捕れる。散々悩んだ挙句に結局網を買った。

帰宅後、小さなバケツと新品の網を持って川へ向かった。子どもたちが幼い頃、毎日のように遊びに来た小川だ。水面は低い。膝をついて、バケツに三分目ほど川の水をすくって入れる。そして、狙いをつけた水草の陰にそっと網を滑り込ませていく。

川のすぐそばにある家のおばあさんは、九十歳をとくに過ぎているはずだがまだまだ元気だ。昔、私が毎日子どもたちと魚を捕っていたとき、「子どもさんも好きなんじゃろうけど、お母さんも好きじゃなあ」とよく笑われた。私が子ども以上に夢中になっていたことを見抜かれていたに違いない。

あれから二十年。さすがに五十過ぎたおばあさんが一人でメダカを捕るというのは少々恥ずかしい。網を買うかどうか悩んだのもそのせいだ。人目につかないうちにササツとすくって帰らなければならない。特にあのおばあさんだけには見つかりたくない。

そこは昔取った杵柄。ぐぐつと網を揺らしながら素早くすくい上げる。失敗はない。数匹のメダカが網の底でピチピチと銀色の腹を光らせている。

そうして手に入れた十匹ほどのメダカを瓶に放して、私は悦に入り、夫に自慢した。

しかし結局、スイレンは一輪も咲かずに腐ってしまった。水は濁り、いつしかメダカの姿も見えなくなった。冬になると瓶の水も凍りついて、メダカは死んだと思っていた。

ところが、春が来て、放置したままの瓶の中を掃除しておこうと水を流してみると、なんと、底の方から三匹のメダカが奇跡の生還を果たしたのだ。

私は再びスイレンの株を買ってきて植えた。

三匹の仲間を増やしてやるために、今年の夏は二歳になる孫をつれて、堂々とメダカをすくいに行こうと考えている。

スイレンの咲き誇る瓶の中で、メダカが元気に泳ぎまわる光景が目には浮かんだ。

サンスベリアに見とれて

江 国 千 春

「せっかく生まれてきたんやから、人生楽しまんと損やで」

これはゆきちゃんと言葉だ。六年前に亡くなった彼女の言葉を、最近よく思い出す。

近所に住んでいたゆきちゃんは私より十六歳年上の五十八歳だった。

「幸せな子と書いて幸子だから、ゆきちゃん、て呼んでえな」とお茶目に言われた。花が大好きで、ピンクの花手毬の苗をくれたことがきっかけで仲良くなった。リウマチを患う彼女は、あちこちの関節が変形して、毎日痛み止めの薬を飲んでいた。庭仕事はリハビリになるし癒されるからと、不自由な手で庭を花でいっぱいにしていた。春と秋には二人で花屋に行き、苗を箱いっぱい買って帰った。

「テレビでサンスベリアという観葉植物は部屋の空気をきれいにするゆうてたで。一緒に買おうや」と、彼女に言われて購入した。

「痛い痛い言うても、他の人にはわからんし、聞いた方も暗くなるやろ。せやから黙って痛み止めの薬飲んでんや。痛くても毎日杖ついて歩かんと、歩けんようになる」と、一人でもコンサートやお芝居を見に行っていた。徐々にリウマチは悪化し、骨折で入院した後、ガンが見つかり、六十四歳で逝ってしまった。

彼女が生きていたころは、私は元気でずっと看護師の仕事をしていた。しかし、去年から激しい腰と足の痛みで、定年よりはるか前に仕事を辞めざるをえなかった。彼女の言葉を思い出すのは、痛みを抱えて生きてきた気持ちが変わるようになったからだろう。私も痛み止めを飲んで歩いてしたが、家にこもりがちになった。

そんな時、出窓に置いてあるサンスベリアの葉の根元に、小さなアスパラガスのような花芽を見つけた。数日で細長い茎が伸び、茎の両側にいくつものつぼみがついた。

ある夜のこと、甘い香りが漂ってきた。サンスベリアの白くて細い花びらが開きかけている。やがて香りはどうどん強くなり、部屋中が高級なせつけんのような香りに包まれた。繊細なランのような花は思いつきり反り返るように咲いていた。だが花は翌日にはしぼんでいた。サンスベリアは熱帯の植物で日本で花を咲かせることは難しいらしい。どうすれば花が咲くのかは不明で、気まぐれに咲くのを待つしかないそうだ。出窓のカーテンを閉めきっていたので温度が上がり、花が咲いたのだろうか。ゆきちゃんが私を励ますために花を見せてくれたのかもしれない。

植物は環境しだいで気まぐれに花を咲かすこともある。私も環境がかわれば、また違った花を咲かせられるのかもしれない。サンスベリアの花言葉は「永久、不滅」だ。思いがけず持てたこの穏やかな時間を大切に使おうと思った。今までは忙しくてできなかった趣味を始めてみよう。永久に、不滅な強い心を持つようにしていれば、いつかまた働ける日がくるかも知れない。その時には、看護師としてきつとこの体験がいかせることだろう。